

瀬越文助 筆『文化五年伊勢道中旅行記』(一)  
みちつね

佐 竹 昭

ここに紹介しようとする『文化五年伊勢道中旅行記』は、芸州倉橋島の瀬越文助（雅休）ら総勢十六名の伊勢参宮の旅日記である。御子孫にあたる尾曾越文亮氏所蔵にかかるこの旅日記は、次に上段と下段にかけて翻刻するように、二種あり、一つがみちつねの手によるもので、あと一つが文助自身の手によるものと思われる。

紹介・翻刻を試みる意図を述べるまえに、まず簡単な書誌を記しておこう。みちつねの手になる旅日記は、三冊からなり、大きさはいずれも縦六センチ、横八・五センチの袋綴、豆本仕立のかわいらしいもの。内容上、上冊にあたるものには、渋引表紙に打ちつけ書きで「道中旅行記」と表題を、裏表紙に「みちつね」と記者を書く。表紙に紐がつき、裏表紙に乳に笹瓜で止めるようになってゐるが笹瓜は失われている。上冊の丁数は百丁ちょうど。中・下冊は上冊とちがって表紙などはなく、それぞれ四〇丁、二〇丁ずつ袋綴にしたもので、この三冊が一本の紐で綴られている。

三冊いずれも細字でびっしりと記入され、字の乱れや後に思い出して注記を加えたようなところもあり、道中の手控えとして実際に携帯し、日々記入されたものとみてよい。記主のみちつねについては、今のところ知るところがないが、文助と交流のあった相当の教養を有する者であろう。三冊の内容は、上冊が文化五（一八〇八）年四月十日の倉橋出帆から伊勢参拝をすませた六月四日の大坂帰着まで、中冊が大坂帰着後の高野参詣と一カ月近い大坂滞在および閏六月十日の倉橋帰島まで、さらに旅中出費の覚を記す。下冊には重ねて大坂帰着後の高野参詣と、全行程の簡略な一覧が記されている。高野参詣の部分、中冊と下冊で重複しているがその関係は後考に待つ。

次に文助の手になったと思われる旅日記は、大きさが縦十二センチ、横十七センチの大和綴の横帳で、表紙はない。倉橋

出帆から伊勢到着までを記し、後半は未記入。記主を明示するものがなく確定できないが、内容的にみて旅の主導者である文助その人のものとみてよいであろう。携帯にはやや大きすぎるかもしれないが、記入のあり方からやはり道中で記入されたものとみられる。

記主に推定される文助は、明和八（一七七二）年、代々組頭や庄屋を勤めた倉橋島の有力者の家に生まれ、島の郷学敬長館で島居好之に漢籍を学ぶ。旅は三十七歳の時で、父に続いて組頭在役中であり、帰島後十二月には庄屋に任じられ、文政三（一八二〇）年に五十歳で死去している。文助はその後も多賀社参拜（紀伊半島経由）に出かけるなど、旅を楽しんでおり、また京都の公卿、芝山持豊の門人となって和歌を学び、号を斗山という。

右のような文助の趣味は、旅の日程や旅日記の内容にも反映されており、各地の和歌にかかわる名所・旧跡をたんねんに尋ねて記録している。旅をともしたみちつねの旅日記も、同じ行程であるからよく似た内容となっているが、文助の歌好みの特色が、対比してみると理解されよう。

さて、本資料を紹介・翻刻する意図であるが、一つには旅先の各地の状況を知るためであり、もう一つには当時の倉橋島の有力者たちのあり方を知ることにある。

前者についていえば、記主が誰であるかとは別に、記された各地の文化五年当時のありさまを知る資料として提供しうるもので、また実際このような旅日記にみえる観察は、しばしば該当地域の記録にはない新鮮な一面を描いてくれることが多い。文助の旅日記にあわせて、同行程のみちつねのそれを翻刻したのも、それが完備されたものであり、右の点を配慮したものである。

さらに、倉橋島を素材にした地域研究の視角からすれば、後者の点にも留意しなければならない。一般に、近世後期にはいると、農村の上層部のなかでは学問・文芸に親しむ者が増えるが、ここに紹介した文助も島居好之に学んでおり、好之を招いて設立された敬長館では『倉橋版孝経外傳』の出版や、好之の著作『幼学式』の出版に関与している。文助の学問・文芸の水準は、この旅日記にみる限りとくに高度とはいえないが、その孫の代にあたる力太郎（俳号松圃）のころになると趣味も本格化し、頼庵庵を島に迎えたり、その弟子河野小石を敬長館の師に迎えて親交を結んでおり、嘉永五年の大宰府参詣に到っては、何度も推稿を重ね洗練された歌日記『西遊紀行』を残している。

これらの芸術的水準はともかくも、彼ら農村の上層部に位置する人々が、社会的趨勢としてどうしてそのような趣味なり

学問なりに専心するようになったのか、それは地域によって様々な場合があったと思われるが、幕末にかけて深まっていく農村の分裂と対立の一産物として、この倉橋島という地域に即してその経緯を考えてみたいのである。

なお、今回は紙数の関係上倉橋出帆から大坂出立の前夜までを翻刻した。上段がみちつねの旅行記、下段が文助のそれで、上段にあわせて頭注を付した。本資料は、倉橋町史編纂にもなる資料調査によって見出されたものであり、現在、膨大な資料の整理を進めている途中である。いつもながら所蔵者の尾曾越文亮氏の御好意に感謝するとともに、倉橋町教育委員会の皆様にお礼申し上げる。また調査にあたっては本学部日本研究講座の先生方の御指導を仰ぐことができた。あわせてお礼を申し述べるものである。

### 〔上段〕みちつねの旅行記

戊辰文化五年四月十四日、類越の寿君京師へ歩行御思召アリケルニ、我等も伴行、所々遊環の記を拙き筆にしるす。

### 本浦出帆

四月十四日 九つ時出帆ありける砌、八幡社へもふて、船に乗り、餞別の竹葉ともくみ、其友ハ十有五輩にすぎたり。それ押よおせよとこき出し、遂に離別の義をいたし、祝寿の手をうち別れしよりこのかた、左にしるす。

### 鹿老渡 蒲刈島

同日鹿老渡ニ至り伊勢の浜へ船を付、社参。舟に乗り、三・両輩酒を酌ミ、汐に応し刈蒲(蒲刈)へイタリ。夜雨降り。

翌十五日 天気。汐逆キ、依而庄屋兵右衛門殿へ上り、段々變心アリ、又しを願し、昼出帆、三原洲浪(浪)浦泊船。

浦泊船。

### 〔下段〕文助の旅行記

卯月中の四日、吉日なればとて、船をうかめて漕出しけるに、人々名残をおしみて沖のかたまて友船を出し見送りけれハ、

さらば／＼ かけ見ゆるまで ほととぎす

卯月中の四日吉辰なればとて出立けるに、人々見送りすとてつとひ来り、酒など出し益も数に及ぬ。早ク船をいたせよと船人ともにすめられ、船を漕出しければ人々も猶したい、外なる船に打乗りつム、沖のかたはるかになりければ、漸々見送りの人々はもとのくがへかへり、いと／＼遠されハ、たかひに手ヲ上ケおもひ／＼によびやいつム、船かけも予か里も漸々遠されは、

夫より鹿老渡へ船つけ、義計(計)彼の地に役務のありて逗留いたし居けれハ、彼の人へいとまセンとて宿を

糸崎  
尾道

鞆

保命酒

下津井

田の口

瑜伽山蓮台寺

牛窓

赤穂

室津

丸亀領河内莊

揖保川

十六日 朝、糸崎八幡社へ参詣。其より出舟、尾道向島通り過なとし、尾道町又彼是を觀望し、景色言語を絶し、又交易の船へ夥敷見へ泊。追々村々厩し此内ニあぶと観音参る、鞆津へいたり、夕方より鞆町、また祇園様へ参り、別々参詣所へ至り、婦りかけに名酒屋へ参り、皆々酒たべ船に帰り、色々の物語にて臥りける。

十七日 鞆津より出帆、備前下モツイ至り、町内歩行、観音寺又大明神様へ参詣す。其夜とまり。

十八日 翌朝出船、逐風にて卒事ニたのしりと云処へ船付、五つ時に瑜伽山へ登山ス、道乗りハ三十六町ナリ。九つ時下向。出船ス。其次村はヒビ村ナリ。浜、小松アリテ至極景地ナリ。其筋向ハ上るうが島ナリ。それより色々村アリ。牛窓へ参り町内見物、船座へも参り見る。其夜とまり。

十九日 朝、同処出帆。道筋アカウ半官公ノ城を見過ル。追々村在処をへて、室へ同日昼後着船。町内見物、明神様へ参詣ス。婦りニ道中用意の笠、或色々入用のもの求、夕方帰り、夕飯ともたべいなや、色々のしたくいたし、翌日の道中用意致し置申候。

廿日 室津より陸路ニ而行き、(河内)各地各村茶屋ニ而休息。雨、四つ過ぎより降り、いほ川右ニ見て通行、大川なり。川舟酒樽五、六十丁積ミ上ル、陸道ハ松

尋ねて行ければ、又夫より義計、(野村)覚兵衛、房右衛門おとわなと船まで見送参ル。夫より蒲刈島三ノ瀬へ船かゝる。同夜同所泊船。夜より雨降る。翌日天気。出来屋へ揚ル、酒肴出ル、三味泉杯も出ル。

十五日 八ツ時頃同所出船。其夜砂見ノ沖ニ泊船。翌十六日 朝出船、三原のいと崎八幡宮へ参詣。夫より出帆、あふと塩かゝり、同夜鞆へ泊り。雲。

翌十七日 晴天、鞆津出帆。昼八つ半頃下津井へ着船、風呂へ入ニ揚ル、泊り。

同十八日 田の口へ着船、直ニ瑜伽社参ル。御守四つ請ケ帰ル。参ル道、革の腰さしすつる。直ニ出船、順風天気能。同所茶屋島屋ト云登リニ者左り中段之最初ニ有。田野口ヲ乗出して、沖へも地のかたにも四方八方島々多き中に、京ノ上藪与いふ島有り。古しへの墓もありと聞ゆ。島のなりハさのみ名有けなる島とも見へすありけり。へいき浜家村有。(図略)同十八日、泊り、牛窓町内船座等見廻り、社寺ニ参。法蓮寺与申寺宜景地也。

同十九日 室津へ泊船。明神社参ル、七社共惣檜皮ふき、大門龍井ニ獅々其外ほり物至結構也。夫より道中発足之買物調、別紙入用帳有り。

同廿日 室より出立、夫より山越、大松有、丸亀様御領分河内与申由、京極様庄城ノ茶屋ニて昼飯した

青山川

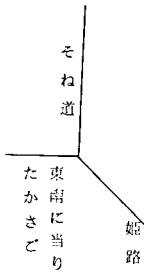
姫路

市川

曾根天満宮

原なり。狸々村渡し場前茶屋ニ而中飯たべ、いほ川の渡し渡ル。川上ニたつとのト云至極景邑アリ、是ハアワジノ守ノ□土アルト云コトナリ。大坂へ参ルニ道もアリ。川を渡れハ堺の村、其次ハもん前と云、其次みかる村也(聖徳皇太子寺アリ)、其次大田、同其次ハ大田原なり。其次ハ青山村、左道ハはりましよしや寺道、右大道ハ本往来なり。一橋領なり。青山川おわれ渡、手品村へ渡ル。茶屋へより、茶たはこたべ。此茶屋、枯狭屋ト云。是ハ諸国ノ大名方小休処ナリ、其次ハいま軸村ナリ。其次ハひめしへ参ル。宿者米屋(瀬右衛門)ト云茶屋へ宿り。

廿一日 発足。市川渡、上ハ筏野之金山流、川副武百軒餘、すそハしかまへ流る。朝五つ半時ニ通、ヒメジ御殿台を右ニ見て下ル、其次ハ山のわき村なり。其次ハ五着村也、茶屋ニ依りて休。其次福井村也。左リを見れハ北軸村なり。豆崎村ノ道の次第。



曾根天満宮、松一見古松、土ヲムヒアリテ外ニも松樹ケリ。浜ニ松原アリ、副卷丁ニ三百軒もアリ。夫

ゝめル、大川名を尋にいほ川与云はる。小里あり、たつ野与なん、

たちそめて 一日も来ぬに いほか出て 足のいたさに 袖そ川かぬ

いほ川の流あぼしへ出ル由、

夫より川を渡り堺の村、次ミかる村、其次大田村、其次手品、茶屋有り、きまやう屋ト申、諸国御大名様方御小休所。次ニ今しく、夫より姫地町、米屋与云

茶屋へ泊ル。大田か原ニてかご式つかル。峠ニ御領分御堺、夫より上、一橋民部様御領分之くへ有り。夫よりひめじまで巻里半、室より同所迄五里有。

一同廿一日 姫地町米屋瀬右衛門処出立、曾根天神へ参ル。松有り。夫より石宝殿、夫より高砂の宮相

生の松、同所尾上の鐘、此処謡の古所、已前の松ハかれ、今の松ハ三代目之由、古木宝物与成、めうか

銭ヲ取り見する也、同社内ニ片枝松有り。姫地町よりミふのへ村迄の間、村々名付。市川渡り有、上ハ

いく野々銀山より出ル、是者丹波之國也。下ノ流者しかまへ、川はゞ式百間余。朝五つ時半通。常の水

流はゞ凡五六間程。御殿台ヲ右ニ見やり、其次者山脇村也。其次五着村也、茶屋へ寄り休。其次福居村

也。向ニ丑の谷村与記有、其次左りハ北じく村也。其次豆崎村。(道分岐図略ス)

其

石の宝殿

高砂

別府

金崎松浦そば

明石柿本神社

より石の宝殿へ参詣、御室老<sup>(命)</sup>兩年跡焼失。下向、茶屋依り中飯認メ。高砂尾のへ道、うを崎歴、荒イ川渡り、あらい村、荒威大明神様へ参詣ス。高砂町へ行、甚町筋宜敷相見申候。夫よりカウヅケ天王様、住吉相生松拝見スル。天の釣舟、養田村ニアリ、尾上林八丁四方。高砂尾の上鐘拝見、方枝松、御本前より参れハ左ニアリ。左右ニ茶屋アリ、左ノ茶屋ニ寄ル。夫より池田村へ通ル。天神林と云テ四方八丁程アリ。ソレヨリ<sup>(新野辺)</sup>ノべ村へ参ル。部府住吉大明神と申奉る御社ニ手枕の松アリ、是ハ甚名社ナリ。ヲキヲミレバ<sup>(談)</sup>アワジ島、向春ルカニミユル。大明神前茶肆ハ大坂屋ト申、七つ半時ニ着宿ス。料理、汁味噌おひらき、菓子椀竹の子ニふ・椎茸、猪口ウマメノヨゴシ。廿二日朝、汁ワカメ、四寸ウドン豆腐、猪口シタン。

廿二日 部府発足、明石道へイツル。右向本庄村、二タ子茶屋腰休。<sup>(地名)</sup>茶屋腰休。長池ビンボウ池アリ。明石かなが崎松浦そば名物なり。此茶屋ニ寄り暫休息ス。そばたへ、四ツ半時其茶屋立。

清水村、宿アリテ甚奇麗ナル所ナリ。其外長谷村の茶屋ニより中飯認。鯛いり付、にしめ、竹の子、ワラビ、ウワ豆。此内ニ村々東西南北ニアリ。

明石柿本大明神人丸様へ参詣ス。盲杖桜・ハツブセ

曾根町、能町也、南ニ松原有り。石宝殿、当年二月失火ニ也焼失之由。下向ニ茶屋へ寄り屋飯したゝめル。其処ニテ次キかこ致ス。うを崎ヲ見て通。荒井河渡ル。荒井村大明神有り。夫より高砂町へかゝリ、寺町有り、宝瓶山寺<sup>(説)</sup>寺有り、浄土宗也。町内至而広し、カウツケ天王尾上へ来ル道ニ養田大明神有り。養田村与言也。天ノ釣舟石与云石有。

夫より尾上村松原林、四方八十間四方。夫より天神林有り、天神社盛中ニ有り、此盛至而大林更也。夫より池田村へ通ル。

べふへ着キ住吉大明神有り。手枕松有り。段々面白社有り。別府宮本大坂屋伊之助与云宿へ泊り。

一同廿二日 朝立出、夫より明石道筋、左ニ本庄村ヲ見なし、又壱里計行、ふじ屋<sup>(作)</sup>作五郎与云茶屋へ休、又長池茶屋へ休。それより下りてひんぼう池アリ。

明石人丸社奉猷和歌式首  
うけえんと 祈来にけり 明石かた  
神のおしへの しきしまの道  
おろかなる こゝろにしたふ 敷島の  
道をそれまし 明石なる神

右ビンボウ池、明石賀那が崎松浦そばと申して名物なり。此茶屋ニ寄りて暫休息。備萬吾子と鑿<sup>ウツ</sup>を折、甚宜敷茶屋ゆへ鬱散致し、右のそば皆々したゝかた

ノ梅アリ。小馬水吸池モアリ。芭蕉翁墓アリ。蛸つ  
ほや はかなき・夏(夏)の月。タゞノリ墓アリ。丹波公  
ノ玉屋アリ、是ハ左ニアリ。向ハあワジシマノハツ  
トテナリ。其より東ヲミレバヲノコロジマアリ。人  
丸ノ詞堂、江戸より一夜ニ参ルト云コトナリ。其下  
の台ハ亀なり。兩場川筋向ニ小高き山アリ、是ハ岡  
部ノ六ヤタ陣所をかまヘル古閑アリ。右諸々明石山  
見物いたして柿本人丸の御社に詣ふて、押し奉れば  
まことに往古のことおもひ出されて、とふとくあと  
をもなかく、おろかに侍れと拙き筆を染て

夏島の 道をのこすや 明石山

いまに名高き 跡(あと)とぞしたわる

是より下向、左腋五六軒(軒)上りテ松屋と申ス茶屋宿と  
り。右ニ書記ス明石山を案内者をと見物致ス。其  
夜松屋長二郎方宿り。朝出立、汁、にしめ、香の物、  
梅干。

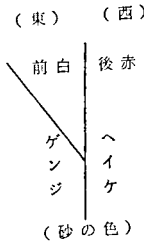
舞子浜  
廿三日 其より舞子ノ浜茶屋亀屋ニ休息して、向淡  
路しまを遠見ス。舞子の浜をはなれ、多路(多路)飛村茶屋  
より休息。舞子のはまをはづれ、チウアイ天王石礎  
アリ。明石、摂州との川堺わきにざくろ石アリ、梶  
原袖しり石なり。是を梅ヶ崎と云、エヒラノ古石ア  
リ。夫よりアツモリノ塔ニ参詣ス。向名物ソバへ寄  
給休ム。夫より三ノ谷、夫より式ノ谷、竜ノ谷。鐘

べ、朝四つ半時ニ出立、村々段々アリテ清水村へ到  
り、此処ニ諸大名方ノ宿もアリ。御小休もアリ。甚  
入口奇麗ナリ。夫々長谷村の茶屋ニ依り中飯認。お  
数ハ鯛のいりつけ、にしめ、竹の子ニうわ豆、わら  
びすこし。休息して出立。此内に村々東西南北ニア  
リ。追々経歴して明石城下ヲ通り、同柿本人丸靈社  
もふて、名所見物す。人丸様道筋左ニ依れハ忠度ノ  
墓所アリ。復々人丸道ニ戻り先ニ向カエバ兩場川筋  
向ニ小高き松山アリ。是者岡部ノロクヤタ陣所をか  
まへし処なり。かみニ鳥居アリ、其腋に駒水合(駒)ノ池  
アリ、其左ワキニ芭蕉翁の墓アリ。

蛸つボヤはかなき・夏(夏)の月。

其上ニ丹波ノ守ノ御玉屋アリ、其上ニ登レバ柿本大  
明神ナリ。御本社ニ盲杖の桜アリ。是ハたれなかも  
知らねじ盲人此宮ニ参詣して和歌一首誦ミければ、  
目、卒事聞キ求明、直ニ桜らの木枝を広前の庭につ  
き立置帰れば、其枝若枝さし出し名桜といまによば  
わる。神前左腋ニ八ツ芳ノ梅アリ。是者老輪ニ八ツ  
筒突ノリ、其梅ヲ船ニ造り凡長サ五間もアリ。帆ノ  
高サ式間餘アリ。又梶モアリ、下リモアリ。向ヲ見れ  
ばアワジ島アリ。夫より東を見れハヲノコロ島程遠  
ク見エ、明石浜辺より向アワジ島迄三十六丁アリ。  
其前を順風ニマカセ船通易ス。其景趣言語を絶ス程

掛の松アリ、ヒヨドリ越へト云。



須磨寺祥福寺

スマ寺へ参ル。(神功皇后)シン宮皇宮ツリ棹ノ竹、竹女葉男、源義経腰掛の松、青葉笛、三ツ枝ノ笛、小ノ笛ハ。

生へなりの 松かさり也 須磨明石 かうへ它□  
旅人の たひを逃るや 表の秋 かうへ徳雄

男一介書

(祥福寺) 福祥寺

ベンケイ若木の桜、(二枝)いつしをきらばいつしをきるべし。(一節)相老の松アリ。庭に、ツ、ジノ木を以テホリ抜たる騎鹽、アツモリノ。

浜を下ニ見ればすまぬ閑森アリ。本通り下、寺より下り、左りを見れば雪(行平)ヒラ月見の松、イナバ山トモ云。松風・村雨堂、塩酌云処アリ。

(図略ス)

福祥寺スマ寺ノコトナリ

安養寺ノ鐘。ベンケイ矢田部郡にウ山田庄原村トリカヘリ、是則てうちんニつり鐘と云ハ是なり。則是ハかね掛ケノ松ナリ。

ニアリ。

盲杖桜の歌、

ほのくくと 誠明石の 神なれば 我にも見せよ  
人丸の松とも墓とも

人丸の歌、螢火の灰とも云、たかぬ火の灰トモ云題、京御歌所より参ル。難題なれば和歌難出テ、赤石の

浜松原へ一夜考ニ出られけるに、夜明ケ迄(不出カ)、然

ル所へ小舟一艘棹来り、漁翁一人来り、今此処ニヤスラフ人ハたそトトフ、人丸ト答るに、何事の為ニ

ととふ、和歌題難題ニて出かたくと答、題ハケ様くト答るに、漁翁夜もすから与申而去ぬ。夫より

夜もすからの歌出ル。

夜もすから もゆる螢の 火はきへて 夜明て草  
に はいかゝる哉 トいへる。歌よませ給ふて見

給へハ、小舟ハ露ニここめて見遠ふニなりけれハ、  
ほのくくととの歌出ル。

次、山田村、六社明神社有、御前ヲ通ル。次舞子の  
浜有、松原風景よし、茶屋、

君か代を いはふ舞子の 松はやし 風はひゆ  
くく 波はとふく 百枕舎一友

松のれんに、  
けふよく 日和うれしき 四月客 延年拜

枯木に耳ツくの絵有ルがくに、



廿三日八ツ時ニ長田村、摂津ノ国本宮長田大明神へ  
参詣ス。

廿三日七ツ時ニ兵庫、經島山(築島寺)、真ノ光寺西  
月山、大仏アリ。一遍上人墓アリ。清盛ノ墓ニ拜  
参、ノウフウ寺。

人丸の歌

御歌所々難題出、其題ハ螢火灰ト云、又たかぬ火の  
灰ト云。依テ人丸和歌何卒詠出はやノ出シ度思召  
アレトモ心に不任、赤石の浜松原ニ一夜考ニ出れけ  
るに、其夜明ケ迄も小歌不出、されバ、小船一艘掉  
来り、漁翁云ニハ、何モノカ此処ニヲリシハト云、  
ケレバ、人丸ト答、何事の爲にととへば、人丸云ク、  
京御歌所より右之通り難題ト云ケレバ、漁翁夜もす  
がらと申シテ行方不知立さりニけり。去ルニ依テ人  
丸色々考被遊、様々ノ左之通りの歌御詠被遊ル。  
夜もすから もゆる螢の 火はきへて 夜明て草に  
はいかゝる哉ト詠ル。去ルニ依テ人丸何者か今一度  
右之人アイ度被思候得共、行エ不知れバ、其時ノ御  
歌に、

ほのほのと 明石の浦の 朝霧に 島かくれ行  
舟おしそおもふ

廿三日兵庫へ着シ町内一見ス、当日ハ高松少将御宿  
ニテ町内宿なく、依而天神様へ別当満福寺江宿り。

兵庫

うち群て 笑ふ雀の 酒もりを 隣に淋し 壁の  
ミ、つく 四方真〇

床に三人咄処之詩有、画之ものハ句なし、

冬〇の狗に 成すましけり 海のおと 漫々〇

近ふ見し 淡路もけさは 遠目鏡 霞かゝりし

春の海かよ

笑梅亭龜紫

仲アイ天皇マイ々タモウ其故舞子の浜ト名付。浜長  
サ八丁、浜中ニ少シヲカニ盛アリ、八幡宮有。松  
原之うへ、仲哀太子御石塔有〇。

袖すりの石ト云。是処一ノ谷の西の一ノ門、梅のさ  
ぎトモ云、其上ノ山ニ糸ひらの梅の古跡アリ。夫ガ  
一谷アツモリ墓へ参ル。茶屋ニ寄ル、そばしたゝめ  
る。酒モ少し呑ム。三谷、其上二谷。一谷、其上山  
ひよ鳥越。夫よりよしつねせいそろひの山、鑑〇かけ  
松見ゆる。

夫よりすま寺。本尊ハ正観音也。宝物ハ、中尊曹葉  
の笛  
一箇、次キアツモリの御影アリ、次キ同鑑アリ、次

次キ弁慶の一枝ヲ切ラハ一子ヲ伐ルの直筆アリ、下  
へタタル道ニ若木の桜アリ。人皇后皇ノ釣竿の竹有  
り、葉ハ男竹のふしハ女。釣り鐘。矢田辺郡入山田

此寺者大地ニテ八疊五つ間、十疊一間、六疊式間、勝手餘程広ク、皆通りエンナリ。

須磨の浦ニ而 雅休

須磨の海士を よみし翁の跡とへは われとこたふる 人たにもなし

須磨の浦浜辺を下ニ見おろせば、都舎の船逐風ニゆきちがいしは、景色けにもことばにつくしかたくとおもへとも、心にまかせすたゝに侍り。

ゆきちかふ 旅や都の人ならん

かふもあらねば 須磨ぬ海顔

## 神戸

廿四日 兵庫天神満福寺より出立。朝五つ時兵庫湊川水カラ白名物。かうべ。夫より楠木の墓へ見参。其時に拙夫昔をおもいうた侍ル。

世につたふ 操の勲功ら いまに猶

かをりのこすや まさしけのつか。

正成戦死、建武三、当年迄四百七十三、御宝物鑑式つ、軍戦ノ直筆、外ニ色々宝物アリ。

## 生田

夫より三宮大明神。夫より生田大明神参詣ス。道ハ兵庫より参れハ左、右ハ西ノ宮道。生田大明神ハ甚奇麗成宮なり。恵比羅桜アリ。かちへら井ノ椿アリ。御本社より左ワキニ茶屋アリ、寄休。本社ワキ清盛樹おきしはぎアリ。人皇后皇かうらいノ竹アリ。其より生田川渡り、副十間餘り。常ニ水ナシ。夫より

庄原村安養寺の鐘ヲ、弁慶源平の戦の節山へ持上ル。今ハすま寺福正寺ニ有リ。

夫より下り、向ニ行平の朝臣の月見の松与云所有り。少し小高キ山也。夫より南海辺其当り、スマノ関守ノ跡、松の盛有り。スヘテニナン松の並木有り。道

筋より少し上ニ松風・村雨の堂有り、松もアリ。道長田大明神へ参ル、松原有。御社檜皮ふぎ、至而古社ト見ゆる。杉数々有。

夫より兵庫ニ着。高松様御泊りニて宿ナシ。天神社の别当寺へ泊ル。浄土宗也。賄者町宿屋より皆々参ル。満福寺。

西宮宿、胡の前、十文字屋喜兵衛。須磨の入口に塩屋与云村、駒か林与申村も有り。

同廿四日 兵庫出立。夫より楠公墓へ参ル。夫より同所北ニ当り三丁計登り、楠公ノ菩提所有り。

夫よりカウへへ出テ町内ヲ通、生田ノ盛へ出ル。大明神へ参詣。至而古所与相見ル。此御社、当時再興有之者与相見、惣檜作り御やね毎ク檜皮フキ。末社

十ヶ社有り、不残檜皮フキ、其外建物多し。本社式間四方カウランカケテ三間半、四方トモ相見ル。前

ニ少シはなれ拜殿有り。神楽所与相見ル。参レハ左脇ニ三間四方之能舞台有り、少し脇よりニ清盛萩有

り。左り前へエヒラノ梅有り。右前ニ梶原井与云有

摩耶山

ワキ田村へ行。其次尾野村、其次ハ中ひら村。左山ヲ見れハマヤ山ノ白壁遠ク見ゆ。ふもとより五十丁あり。腋ノ浜、入口ノ茶屋ニ依り一前飯し六文つゝ三前給へ六文、豆にしめ也。王子権現様見參之外人里はなれ其わきニ寺アリ、日中ニ通り、摩耶山逐加。

古寺の 夜ハ静也 糸桜 土川

春深し 旅のあわれを 孕鹿 紫暁

古里の 〔 〕 樵夫

導く哉 法の御山の 花の雪

ほととぎす 待や水吸ふ 嵯峨ノ硯

摩耶夫人堂、自在閣、摩耶山 downward、茶屋ニより、沖をナカメ、扱々よろしく、眼下見れは大石村、其次ハ御陰村ナリ。摩耶山天正寺、フモト村より有馬へ四里半と云ナリ。石清水八幡宮ハ大石ニアリ。俵川ハ大石ニアリ。石屋川ハ石屋村。扇子林、ヨコヤ村、住吉アリ、是にさざれ石アリ。布引滝アリ、是ハ腋田ノ前ヘニアリ。住吉前、伊原隅胡屋茂左衛門宜方ニ宿ス。

有馬温泉

廿五日 同宿より早朝出立、大石、御陰、石屋川を上り、有馬へ参ル。道度四里半也。ケシカラ又途中ニ水カラウス多クアリ。夫より山ヲ下り、鹿老渡村へ立寄、茶屋ニ依り休息。夫より有馬へ、同廿五日八つ過ニ着ス。宿ヲ湯所近き処へ取、其日一編入、

り、是も今ハ梅の類植有り。

夫より脇ノ浜へ出ル。同所之茶ニ而したゞめいたし、其日弁当持タリ。夫より摩耶山へ参ル。御坊数軒有り。石垣三段上ケ参り、左リ摩耶夫人、右ハ不動明王、其外本尊数々有り。中尊ニ本堂本尊ハ十一面觀世音菩薩、奥之院与おぼしくて社有り。天照皇大神宮也。此山フモトより十八丁登り、下リニふもとの茶屋ニ休、したゞめいたし。夫より左り道へ出て、西ノ宮より式里余住吉之社有リ参ル。庭ニさざれ石ト云石有り。其夜ふもとの茶屋ニ泊ル。いば原住急ひす屋茂左衛門。但し御影ケ之上也。

同翌廿五日 朝出立、夫より有馬へ越ス。同所より四里之道、乙ケ平与中所ヲ越ル。至深谷ニてまかり道也。道のり三里計行而茶屋有り、鹿老渡村与云。夫より有馬へ老里谷道也。川之石道多シ。有馬へ同日昼八時頃着。其日入湯、昼夜兩度入。

廿六日 昼夜三度、昼後湯、薬師之寺有り。本尊大仏也。大ル戸帳ニ本尊ヲカミがタシ、兩脇ニ本尊数々有り。本堂之向ニ大師たり、中ニ文殊、縁行者一緒ニ有り。本堂より上ニ本坊有り。極楽寺其次キ念仏寺、報恩寺、光明寺、已上四軒有り。脇ニ社有り。熊野之権現、三輪之明神、今一社御相殿ニ祭ル。

同廿七日 同所逗留。

其夜一編入。

廿六日 薬師如来へ参詣ス。報恩寺へ参詣ス。念仏寺、極楽寺、又権現様参詣。

廿七日 湯事之間合ニ轍<sup>(車)</sup>ミの范へ歩行見物ス。夫より帰り入湯。鳥ジゴク、虫ジゴクアリ。是者甚息悪しくセク。皆々ヒカへ帰り。

廿八日 有馬出立、六かう山越新道通り、有馬宿ぬかや喜兵衛

有馬山 ふもとのきりを海ニ見て 浪かときけバ

おのゝ松風 此所ノ徳兵衛

森村正一位イナリ大明神と云テ大社ナリ。有馬より六甲山新道を通り右之社ノ前へ下り、札場ノ清兵衛方へ立寄、茶をたべ、西の宮へ罷越し。九つ時築川渡り西宮へ入口へ行込。

夫より西ノ宮大明神へ参詣ス。下向ニ前ノ角屋ト云茶屋ニより中飯を認ム。枝川を渡、小松村へ行向ふ。川を渡り、土手ニ而皆々烟管をいたス。夫より尼ヶ崎へ罷出、川舟ニ正七つ時出船ス。大坂へ夕方着ス。

## 大坂

廿九日 町見物。阿弥陀池へ行。いたち堀。土佐堀。吉原細見ノ図、美濃・近江<sup>水茶屋段</sup>、荒木庄衛門、白須賀六郎、アイゴそ十、右之介、アイゴ之若ミヲミツ、立堀ノ芝居見物。

## 北久宝寺町

朔日 浄覚町、南本町、西雛屋町、東御本山当りま

同廿八日 同所発足。新道与云ヲ通ル。南へ出ル。

もり村ト云里へ出ル、凡式里半。夫より道々見物いたし、其次キ西ノ宮。胡社ハ町ノ最着西ニ有り。景

たい至而広し。大門より入ル。社数々有り。本社三股有り。中伊勢天照大神宮、右ハ齋尊、左リ蛭子命、広前ニ池有り、鯉多シ。毎ク見廻り町へ出ル。町口ノ三軒目之茶屋へ寄りしたゝめいたす。夫より尼ヶ

崎へ出ル。同所町通り船場へ出ル。船場ハ御城ノ前也。堀りより船ニ乗ル。直ニ川つゞき也。大坂伝帆川へ入ル。廻りノ立売堀へ入ル。同日暮方ニ着。

翌廿九日 宿亭主長兵衛同道ニ而、昼過、阿弥陀池開帳へ参ル。本尊、信州善光寺本尊と同躰也。ゑんぶたごんの御仏也。数々様々也。本尊宝物有之。うる堂、天神ノ御木像有り。菅相丞飛梅ヲ持テキサミタモフ一寸八歩之十一面観音有り。左り廻り御縁有り、縁義<sup>(義)</sup>有り。夫より上人并ニ左野の長左衛門之奥方尼君ニ成り、上人与一緒ニ出テ給ふ。上人十念ヲ授ル。

翌五月朔日 さま之社、玉造之社江参り、兩御堂へ参ル。本之御堂、当時内陣修葺有り。夫より帰り、小橋屋へ寄り買物致ス。但し宮羽織并ニ袖嶋一重

物、其外ハ万五郎、さと、みち、こう、四人之物綿ちりめんニテ单物調ル。夫より四橋へ戻ル。

小橋屋呉服店

で、北久太郎町、御堂筋し、小橋屋ニ而買物致し、高  
楼へ登り御馳走ニ逢、北勘四郎町通り、是より西幸四  
郎町、五幸町、平右衛門町、四つ橋東ノ分通、渡さ  
島町。

二日 堂さ稻荷様前ニ而浄るりさ、夫よりアミダ池  
ニ而カルワザ見る。

三日 高津仁徳天王神へ参詣。姫子社アリ、西北を  
見れ、<sup>(E)</sup> 諸々景色よし。梅の橋渡ル、ウコンノタチ  
花、サコンノ桜。天王寺参詣ス。前ワキニ生玉大明  
神、本地薬師如来、聖徳太子ノ御作ナリ。

四日 大坂町内見物ス

五日 大坂新町傾城ノ道中、甚潤敷衣裳ヲキ、アチ  
ラコチラ一興なり。

新町

天王寺

廿九日夜新町へ参ル。婦リニ茶屋へ寄ル。芸子三人、  
舞子一人。天神与云遊女ヲ呼び見る。已上十六人。